自然と都市
世田谷区二子玉川

18N1085 台堂直己

○二子玉川について調べようと思った理由

自分がまだ小さかった時は二子玉川駅周辺は建物がなく自然が多
かった。しかし近年の二子玉川は高層ビルに囲まれてすさまじく発展して
いる。
昔の記憶なのであまりはっきりしていないということから
今回のフィールドワークを通して二子玉川の歴史や建築について知りたいと思った。

○昔の二子玉川

１９００年代の二子玉川は　歴史をさかのぼると、多摩川は江戸時代には鮎漁が盛んであり、人々は漁を見物しながら川辺で遊ぶというスタイルで行楽を楽しんだらしい。それが明治末期以降、行楽地として発展した
発展に寄与したのは渋谷から二子玉川までの玉川電気鉄道の敷設（１９０７年）である。鉄道開業までは亀屋という料理屋が一軒あるだけだったらしいが、開業後は十数軒に増えた。　また沿線における会社員、軍人、官吏などの中流階級の増大も発展に寄与した。彼らは家族とともに日曜日に休むというライフスタイルを持っていたため、自然の豊かな郊外の二子玉川も行楽地として人気を得た。　１９０９年には、玉川電気鉄道は玉川村瀬田の地主から７０００坪の土地を借り入れて遊園地を開業した（「玉川第一遊園地」という）。この遊園地には、川沿いの田んぼを整備してつくった菖蒲園があり、小鳥、猿、鹿などの動物がいたらしい。河原には兵庫島という小さな島が今もあるが、ここも散策路として整備された。

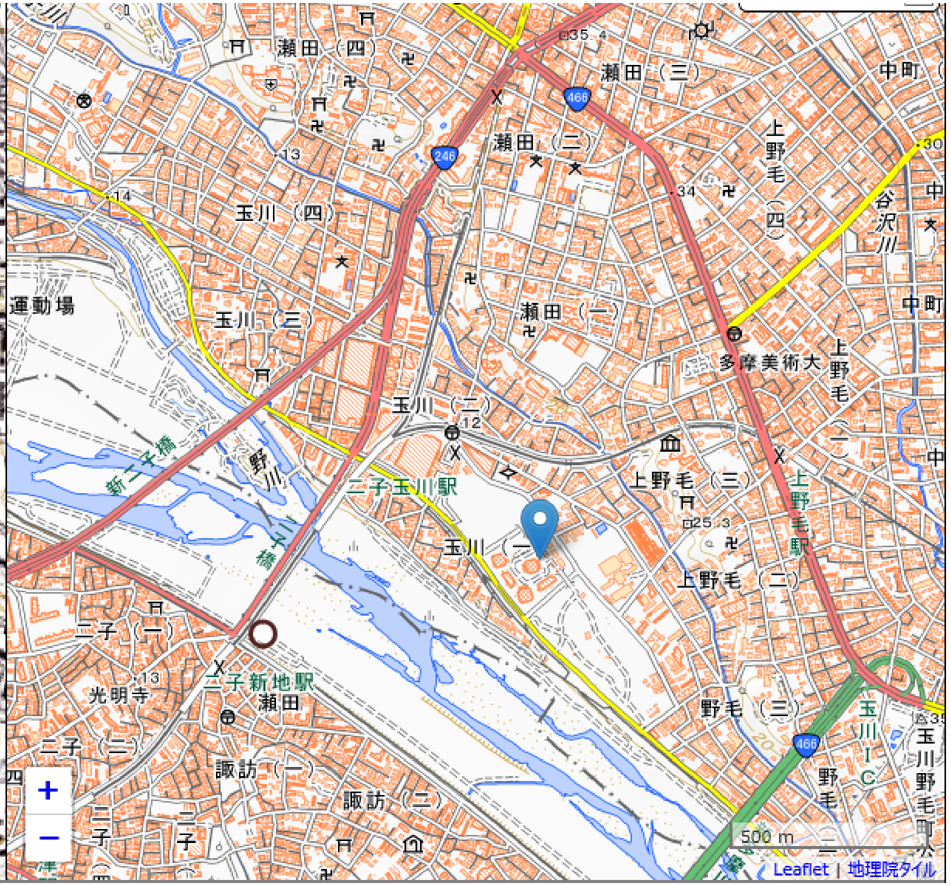
↑1900年代の多摩川

↑玉川電気鉄道

○東京都世田谷区玉川

↓1972年～1982年の二子玉川駅周辺

↓現在の二子玉川駅周辺



ピンが差してあるところは二子玉川駅から近い旧二子玉川園現在の二子玉川公園である。近くに多摩川があることから多くの自然に囲まれていたが
近年二子玉川ライズショッピングセンターや映画館など多くのビルが建ち並び昔の面影は無くなった。この二子玉川公園は自然も多くあり昔の面影を感じることのできる公園となっている。この二子玉川の発展に反対運動なども起きていたが、今は様々な年代の方が利用している。

1974年

玉川髙島屋S・Cオープンの5年後の二子玉川周辺。まだ住宅の間に空き地や田畑が見られる。この年竣工の新二子橋を建設中の様子も見える

1999年

1999年の二子玉川近辺。新二子橋を通る国道246号線が整備されている。住宅が隙間なく立ち並ぶ間に、木の生い茂るエリアも残されている

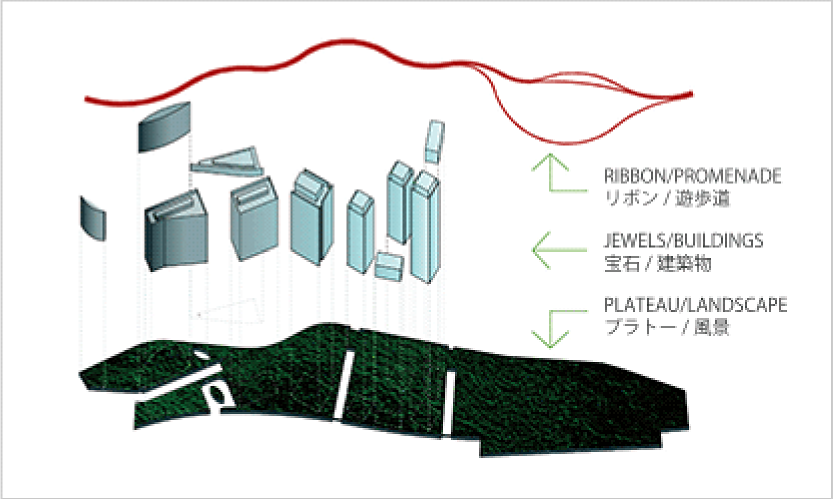
○現在の二子玉川

2010年～2011年のライズの開業以降、二子玉川はさらに発展を遂げ、2015年には映画館などが建ち二子玉川に足を運ぶ人も増えた。
自分の目には発展するだけでなく自然も守られているという感じもした。もちろん減ってはいるが、都市があることによってより美しく目立ったと思う。

新しくできた蔦屋家電
中はスターバックスや本の貸し出しスペースもあり、広い年代の人々が利用している。

○二子玉川ライズ

二子玉川は貴重な自然資産を有していることから、自然をいかに取り入れるかも全体計画の重要なテーマ
駅のような人工的な建造物が目立つ場所あっても、旅の出発点に相応しい場所になるよう、自然の要素を取り入れてデザイン。住宅エリアに近づくにつれ、徐々に近隣の自然を借景に取り入れるように計画されている。



コンセプト【リボン】
「リボン」は、街区全体を流れる旅を表現し、ネックレスのように連なる建物たちと、都市から自然という旅の中で徐々に移り変わるランドスケープとを繋ぎあわせている。同じ様にリボン自体も旅が進むにつれて徐々にその姿を変えていく。都市の象徴となる駅から旅をはじめ、リボンのような遊歩道を辿りながら、自然の景観が広がる公園へと至る。そんな旅のストーリーを、この街に描き出した。

二子玉川駅→二子玉川公園

二子玉川駅→二子玉川公園

二子玉川駅周辺にはライズショッピングモールや玉川高島屋など観光客が買い物や食事を楽しむ建物が多くあり都会感が出ている。
駅から改札を出て東へ進むと映画館がありさらに進むとライズ公園というところに出る。その道中から、道の真ん中に木が植えられていたり、屋上庭園など徐々に自然があふれてくる。そして二子玉川公園は広々とした芝生の空間が広がる。
自然が都会を包み込んでいる。そんな風に感じた。
その横を沿うような形で多摩川が流れており、二子玉川公園からは多摩川に繋がっていて多摩川沿いを歩くことやランニングできるような道がある。

都会→都会の中の自然→自然の中の都会→自然(多摩川)

この流れがあるからこそ二子玉川には都会だけでは無く自然のイメージも持つことができるのだと感じた。

○二子玉川という街

二子玉川は昔から様々な分野で人々をにぎわせ、発展をし続けている。
特に都市のほうは凄まじく発展した。
都市を発展させるにはどうしても自然を壊さないといけない。
しかし、自然を取り入れた発展をすることで上手く都市と自然が共存できていると言える。

引用：https://www.rise.sc/whatsrise/building/